

# 05

## 多様な官民関係機関との連携・協働で 困難を抱える子どもや若者を支援

特定非営利活動法人 TEDIC



東日本大震災直後、故郷の石巻の子どもたちの支援に入った門馬優氏は、2年後の2013年春、Uターンを決意する。そして、石巻の子どもたちの支援を続けていく中で、問題意識は深まり、多様な連携の下、その活動は広がっていった。門馬氏と、門馬氏が中心となって立ち上げたグループ「TEDIC」の歩みをレポートする。

代表者 門馬 優氏(代表理事)

所在地 宮城県石巻市穀町 1-24 駅前ヤマダビル 2F

T E L 0225-25-5286

W E B <https://www.tedic.jp/>





① 門馬氏とスタッフの打ち合わせは笑顔が絶えない ② 食卓を囲みながら、学校や家庭での悩みを聞くことも

ヒト  
「震災が来て救われた」と言わせない社会に

**後**に特定非営利活動法人(NPO法人)TEDIC(以下、TEDIC)の代表理事となる門馬優氏は、東日本大震災当時、早稲田大学法学部の4年生で、同大学の教職大学院への進学が決まっていた。しかし、入学式が5月の大型連休明けまで延期されたので、大学院が始まるまでの間、被災地の支援をしようと思った。NPO法人せんだい・みやぎNPOセンターと、全国のNPOが連携し、運営する「つなプロ(被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト)」のスタッフの一員として、3月中には故郷の宮城県石巻市に入り、活動を開始した。

大学院が始まるのに合わせ東京に戻ったが、門馬氏は、「自分の家族、親戚、知人が風呂にも入れず泥だらけでいる石巻の状況と、いつもと変わらない東京のギャップが大きすぎて、自分の心を保つのが難しかった」という。そして、週末を使って石巻に入り、子どもたちの学習支援に当たることを決めた。

この門馬氏の決意を、大学院の同級生が後押しをする。入学式からわずか1週間で16人の仲間が集まり、交代で石巻に入り子どもの学習支援に当たるグループ「TEDIC」が結成された。「全員が教員免許を持ち、教員志望。きっと、非常に困難な環境の中にいる子どもたちの支援に、自分たちの力を役立てたいと考えていると思いました。このときの経験が、その後の教員生活の中で大きな糧になっていると、当時のメンバーから聞くこともあります」(門馬氏)。

当初、TEDICの活動は8月下旬で終了する予定だった。ところが、8月のある日、

一人の少年から思いもかけない話を聞き、門馬氏は考え方を变える。

「中学3年生の男の子が、『震災が来て良かった』というようなことを言うんです。話を聞くと、震災前から不登校で、父親のリストラをきっかけに家庭が壊れて、兄妹も家に帰ってこなくて、と。そこに津波が来て、避難所に入ったら、県外のボランティアのお兄ちゃんが声をかけてくれて、初めて、自分のつらい気持ちを伝えることができた。『いろいろ失ったけど、そういう人と出会うことができ、自分は救われた』と、彼が話してくれたんですね。

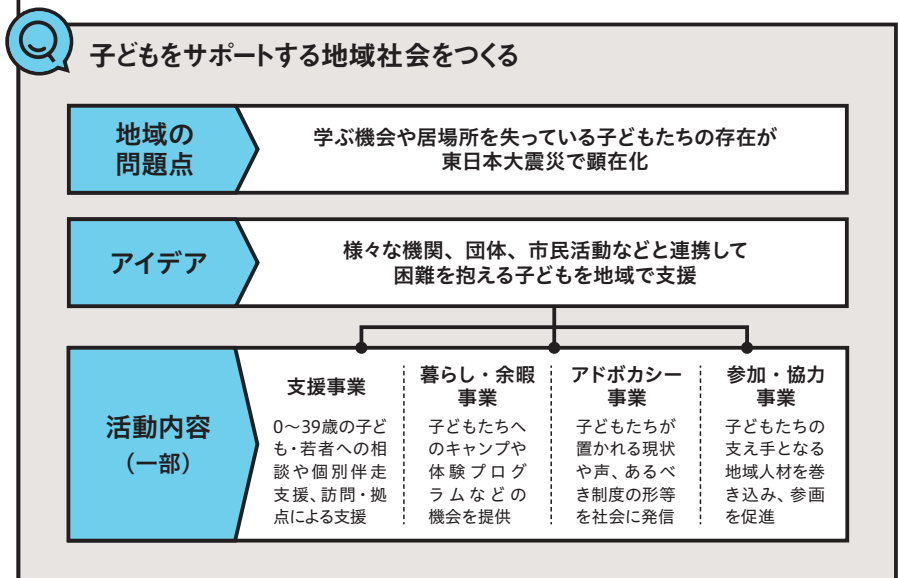
震災があったかどうかに関わらず、厳しい状況に置かれている子どもたちがいるんだという現実を、目の前に突き付けられた感じでした。様々な事情で学ぶ機会を失っている子どもたち、居場所を失っている子どもたちに対して、継続的に支援をしていかなければならないと思い、TEDICの活動を続けていくことを決めました」(門馬氏)。

着眼点  
困難を抱える子どもを学校の外から支援する

**実**は門馬氏は、大学2年生の時から3年間、子どもの教育支援を展開するNPO法人で活動していた。そこでの経験を通じ、次のような問題意識を持ったという。

「学校を通じて、学校外の人たちと子どもたちが接点を持てれば、子どもたちの世界はもっと広がっていくのではないかと思います。学校外の資源を子どもたちに届けていくためには、学校内外の相互の理解が重要であり、内と外をうまく融合させることはできないかと考えていました」(門馬氏)。

東日本大震災後の故郷、石巻の状況は、「絶対に力を発揮しなければならない場面」だったと、門馬氏は振り返る。「地元出身で、子ども支援の活動経験があって、教員免許を持っていて——、『自分がやる以外に他に誰もいないでしょ』





という思いでした。もしかすると、神様が僕に『やりなさい』って言ってるんじゃないかと、おこがましくも思っていた時期もありました」(門馬氏)。

運命のようなものを感じながらTEDICの活動継続を決断した門馬氏は、結局、大学院生としての研究、高校での非常勤の勤務、石巻での支援活動という“三足のわらじ”を履くことになった。「めっちゃキツかった。けど、夢中でやった」(門馬氏)。

大学院生の2年目は、修士課程修了の年でもある。門馬氏も、教職に就くか、石巻での子ども支援を続けるのか、大きな選択を迫られた。そして、「今、夢中になって取り組んでいる活動をここでやめたら、きっと後悔する」(門馬氏)と思い、石巻に戻ることを選択した。教員になるのではなく、学校の外から、困難を抱える子どもたちの支援に当たる道を歩むことにしたのだ。

TEDICは、門馬氏が石巻に戻った2013年以降、自然とメンバーや体制が変わっていった。宮城県内の学生たちが中心となって子どもの学習支援に当たるようになり、より地域に密着していく。

2014年9月には特定非営利活動法人格を取得。法人としては、四つの事業を柱としている。一つは、課題を抱えている子ども・若者、家族を対象として、“困りごと”の支援をする「支援事業」。二つ目は、野外活動、遠足、職業体験、多様な大人との出会いなどを通じて、子どもたちの文化や価値に働きかける「暮らし・余暇事業」。三つ目は、子どもたちの声や現状、現場で見えてくるものを発信し、政策・制度や、広く社会全体に働きかけを行う「アドボカシー(擁護・代弁)事業」。四つ目は、子どもたちに関わる“担い手”



トランプや遊びを通じて、関係を深める

を、興味関心やテーマに応じて巻き込み、コミュニティ化する「参加・協力事業」だ。TEDICは、この四つの事業に基づいて、様々な機関と連携・協働し、これまで以上に多様な活動を展開していった。



### 現場の活動を積み上げ 連携・協働を築く

TEDICが震災直後から行ってきた学習支援活動。2013年度からは門馬氏の地縁を通じての依頼や、被災地を支援する他の民間団体からの依頼がきっかけとなり、複数の学校から個別に依頼を受けて学校に入り、放課後の学習支援に当たっている。こうしたノウハウを生かし、2016年には石巻市の「生活困窮世帯の子ども学習・生活支援業務」をプロポーザル形式で受託した。この業務では、拠点型と訪問型の二

つの支援を用意している。拠点型としては、小学4年生～高校生年代を対象に、一緒に夕食を食べたり、勉強したり、遊んだり、話したりできる、夜の居場所となる「トワイライトスペース」を運営。訪問型としては、未就学～高校生年代を対象に、不登校やひきこもり状態にあったり、遠方に住む子どもへのアウトリーチや、保護者への支援を行っている。他にも、自主事業として、石巻市・東松島市・女川町に住む子どもへのアウトリーチや、保護者への支援を行っている。他にも、自主事業として、石巻市・東松島市・女川町に住む子どもへのアウトリーチや、保護者への支援を行っている。他にも、自主事業として、石巻市・東松島市・女川町に住む子どもへのアウトリーチや、保護者への支援を行っている。

「学生を中心としたボランティアが、拠点型や、場合によっては訪問型で子どもたちと関わっています。先生でもなく、親でもない、専門職とは異なる関係性によって、子どもたちの本音が引き出されたり、エンパワーメント(権限委譲)がされたりしています」と、門馬氏は取組の意義を語る。

2018年には、宮城県の「石巻圏域子ども・若者総合相談センター事業」をプロポーザル形式で受託。宮城県初の取組として2018年7月に石巻市に開設された「石巻圏域子ども・若者総合相談セン



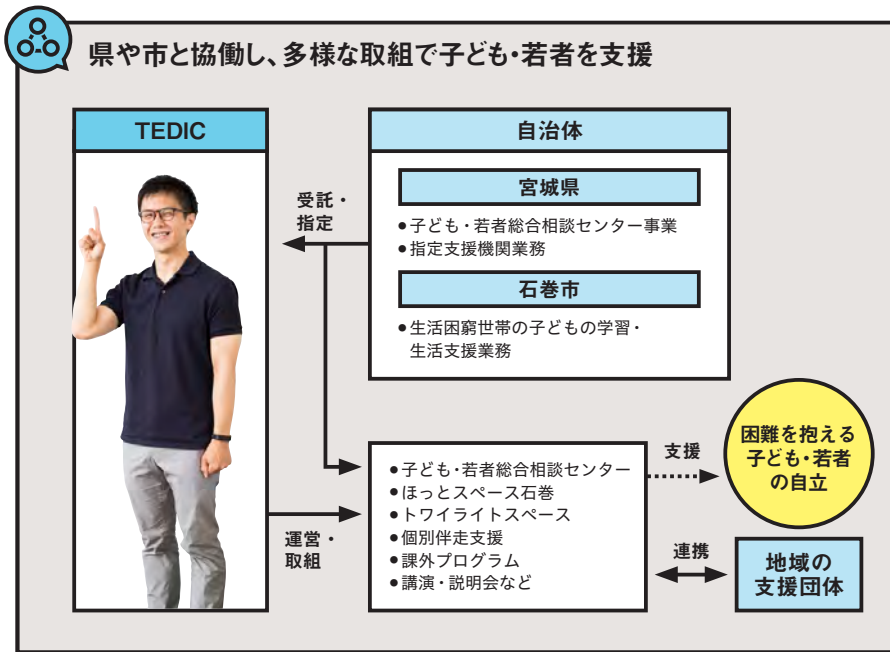
① 様々な専門分野をもつ相談員が、訪問のほか個室で対応する ② 事務初のドアはガラス張りで、ボランティアスタッフも行き来する

ター」を運営している。同センターは0～39歳までの子どもと若者、その家族を対象として、どんな相談でもワンストップで受け付ける総合相談窓口で、様々な悩みに対して、専門分野を持つ相談員が助言・アドバイスや、適切な社会資源を紹介するなどのサポートを行っている。TEDICは宮城県より指定を受けた指定支援機関でもあり、受け付けた相談のうち、長期的または困りごとが複数に絡まっている場合には、複数の関係機関による支援を円滑に行うための潤滑油の役割も果たしている。

他にも、地域の社会資源と連携したキャンププログラムの企画や、動物園への遠足企画の実施など、多様な課外プログラムを石巻市の委託事業や自主事業として行っている。

「日ごろの生活とは違う社会との接点をデザインして、『こんな大人がいるんだ。こんな社会もあるんだ!』と子どもたちの世界が広がったり、文化や価値に影響を与えたい」(門馬氏)。

TEDICはこのように、学校やスクールソーシャルワーカー、生活保護ケースワーカーなど、様々な行政関係機関との



連携・協働を活発に行っている。その経験により、「民間団体にも関わらず、ケース会議や情報共有などを円滑に行うことができている」(門馬氏) のがTEDICの大きな特徴だ。

TEDICの活動は広がりを見せているが、「すべての取組の出発点には、顔の見

える子どもの存在がいる」と門馬氏は話す。データや数字の裏付けよりも、現に困っている子どもとの出会いによって、取組が増えているのが実情だ。多様な機関と連携・協働しながら、TEDICはこれからの困難を抱える子どもや若者の支援を進めていく。

## PLAYER'S INTERVIEW



代表理事 門馬 優

宮城県石巻市出身。早稲田大学大学院教職研究科修士課程卒。大学院在学中に TEDIC を設立。石巻市内において経済的困窮・ネグレクトなど、困難な状況にある子ども・若者・その家族の支援にあたる。

### 目指すゴール

- 1 貧困をなくそう
- 4 質の高い教育をみんなに
- 8 働きがいも経済成長も
- 11 住み続けられるまちづくりを

どんな境遇のもとにおかれた子ども・若者であっても、自分の人生を自分で生きることができる持続的な地域社会をつくるために、自治体や様々な団体と連携・協働をしながら活動を続けていく。



### 困難を抱える人を減らす 長期的な取組が必要

2018年7月に開設された石巻圏域子ども・若者総合相談センターは、9カ月間で671件の相談を受け付け、指定支援機関として720件の個別伴走支援の対応を行いました。合わせて1,391件にのぼるSOSに対して、相談・個別伴走支援として対応しましたが、今後はより人身体制を強化しながら、“相談件数を減らす”必要があります。相談を減らすことには二つの意味合いがあり、一つは、困難を抱えている人を減らすこと。もう一つは、膨大な数の相談を、一つの機関で抱え込むのではなく、地域全体で対応することで、一機関あたりの相談件数を減らすことです。

前者の視点で申し上げれば、この地域に暮らす一人ひとりが、自分たちの暮らしの延長の中で誰かを支えるという仕組みをつくるのが、長期的には必要だと思います。そのために、まずは、支え手の特徴や、興味・関心に応じて、子どもたちに関わる仕組みづくりから、始める必要があると考えます。

後者の視点では、関係機関が、他の機関へとつなぐ“のりしろ”をそれぞれに持つことだと思います。各機関が、役割や機能を相互に理解し合っている状況をつくり、「どこに相談しても、必要な支援に繋がれる」状況をつくれれば、地域がワンストップ化し、SOSのサインがこぼれ落ちにくくなるはずですよ。